

「蔵」の変遷

大阪人間科学大学教授 植松清志

蔵は倉と同義で、貴重な物品を保管する収納施設であるが、出土した埴輪のなかに高床の倉が見られることから、富裕層のステータスシンボルであるとも言える。

ここでは、蔵の機能などに着目し、その変遷を概観してみよう。

原始～古代の倉庫は高床・校倉

原始社会の生活は不明な点が多いが、発掘された遺構などからその様子をうかがうことができる。例えば、登呂遺跡（静岡県）では、人の住まいである竪穴住居とともに、穀物倉庫である高床家屋（図1(a)(b)登呂高床家屋）が発掘され、それ



図1 (a) 登呂高床家屋 側面（平側）



図1 (b) 登呂高床家屋 正面（妻側）

をもとに復元がなされている^{注1)}。竪穴住居は、地面に柱を埋め込んだ掘立て柱の上に梁・桁を架け、合掌である扱首を組み、周囲に垂木を配して内部空間を構成するが、高床家屋は、地面から建物を持ち上げ、板を組み合わせて壁面を構成する「板校倉造り」を採用し、妻面の階段を用いて穀物を収納したと考えられる。人が地面に接して住むのに対し、貴重な穀物は、高床や板校倉によって湿度を考慮するとともに、風雨などの影響を少なくし、さらに鼠返しまで設けられるなど、保管に万全の注意が払われていた。なお、これと同形式の倉が、住吉大社境内に見られる（図2住吉大社高庫）。



図2 住吉大社高庫

収納からステータスシンボルへ

—古代から中世の倉

奈良時代には、東大寺正倉院のほか、多くの寺院などで校倉造りによる倉が設けられている（図3唐招提寺経蔵）。「正倉」とは、本来、役所や寺院などに設けられた穀物や財物を保管する倉庫である。この「校倉造り」は、前述の板校倉造りとは異なり、断面が三角形などの部材を組



図3 唐招提寺経蔵

み合わせて壁面を構成するもので、板校倉造り同様に湿度調整機能を持っている。

平安時代には、藤原頼長が建築した文庫の壁板に石灰を施していることが知られており、防火に配慮したことがうかがわれ、収納物を火災から守る機能が追加されている。この校倉造りは、現代のログハウスと同様の形式であると思えば分かりやすい。

中世には、定期的に市が開かれるなど、経済活動が発展する。鎌倉時代後期には、質物を預かり金融を行う者を「無^む尽^{じん}銭^{せん}の土^ど倉^{そう}」と呼んだが、室町時代には単に「土倉」と呼ぶようになる。このことから、倉の収納・防火機能に加えて、富裕な商人そのものを示すようになり、よりステータスシンボルとしての面が強まったと考えられる。

倉から蔵へー近世大坂

近世の大坂では、廻船による物資輸送のため、川口付近に多くの倉が建てられた(図4川口付近の風景)。大坂が物産の集積地としてさらに経済が発展すると、全国の多くの藩が、物産の取引所として、ことに西国大名の場合には、参勤交代の折に宿泊する御殿を持った蔵屋敷が中之



図4 川口付近の風景

島周辺に数多く設けられ、水辺に土蔵が建ち並ぶ独特な都市景観が形成された(図5蔵屋敷の景観)。防火性・安全性などを考慮した倉は、壁面全体が漆喰で塗り籠められた形式となり、「土蔵造り」と呼ば



図5 蔵屋敷の景観(復元)

れた。防火性を増強したことから、表示も「倉」から「蔵」へ変化したと推測される。江戸では、享保時代に防火建築の奨励により土蔵造りが普及するが、「火事と喧嘩は江戸の花」と言われるように、密集地に立つ庶民の木造家屋はその範疇外であった。すなわち、土蔵造りは富のある者のみが建てられる、大きなステータスシンボルであった。

大坂では、それ以前、1686(貞享3)年の棟札を持つ土蔵が確認される(図6 T家1番蔵)。図を見ると、屋根は寄棟、壁面は漆喰による塗り籠めで、現在の土蔵の形態と大きな差異はない。この持ち主